
とある科学の一時停止(エクスプローラ)

目黒 良輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の一時停止^{エクストローラ}

【Nコード】

N2201Y

【作者名】

目黒 良輝

【あらすじ】

無能力者の少年・上条当麻がインデックスと出会い魔術の世界へ向かっていく中、学園都市では新たな陰謀、策略が渦巻く。体表面に触れたあらゆる力の向き『スカラー』^{シークレットプラン}を任意に操作、変換する能力を持つアレイスター計画の隠密候補のレベル5・一時停止^{エクストローラ}は上層部の命令に従い猛威を奮っていた。一時停止^{エクストローラ}の物語が始まる。

序章 始まり（前書き）

初投稿です。

よろしくお願いします。

序章 始まり

学園都市にしては広大な土地が存在する。その土地の真ん中には全体が白に染められた建物がぽつりと建っていた。

第3能力開発施設。

この施設では学園都市にきた子供が、能力者の素質があるかないかを調べるためにある。

そして今日も能力開発を行う子供が来た。とある少年もその中にいる。

「僕は強い能力者になるんだ!!」

少年は白衣を着た女性を見ながら言った。
女性は少年の姉である。

「強くなるのはいいけど喧嘩はして欲しくないなあー」

姉は機会仕掛けのベッドに寝ている少年に言う。

「喧嘩はしないよー、お姉ちゃんを守るんだよー!!」

楽しみだわ、と言う姉。

「そろそろ始めるぞ」

男の声が聞こえて、慌てて少年に脳波を計るための機械を頭に装着させる。

「じゃあね」

笑顔でどこかに行く姉の姿は、忘れられなかった。

この後の出来事で、本当にさようならをすることになるとは知らずに……。数時間が経った頃、施設に耳障りな警報音が鳴り響く。

「一号機から五号機に異常が発生しました！」

研究員が叫ぶ。

「脳波に以上が起きています！！」

「心拍数が上がってます！！危険ですよ」

「これ以上は無理です」

次々に発生する事態に研究員のリーダーは

「続けます」

冷たい一言だった。しかし、それに異議を唱える者がいる。

「それじゃあの子達はどうなるんですか！」

少年の姉は抗議をしたが中止にしようとしなない。

その時の少年は変な夢を見ていた。

何もない闇の空間。

少年は孤独だった。

頭が痛い。

（お姉ちゃん助けて…）

頭痛の中で少年は光を見た

そして少年は無意識に光に向かって腕を伸ばす。ピーーーーー！！

研究施設に無情にも、残酷な音が響いた。

能力開発の失敗。

男女合わせて五人の子供の死亡が確認された。

少年の姉は自らの無念に、泣いている。

「子供の遺体はアンチスキルに連絡をして引き取ってもらおう」

研究員のリーダーはまるで何事もなかったかのように呟いた。しかし、その直後だった。

ピー、ピー、ピー

絶望に満ちた空間に再び音が鳴り響いた。

「き……奇跡です、一人の少年が生きています!」

一人の研究員が動揺の声を漏らすと、他の研究員達がざわめき始めた。そして

第3能力開発施設は謎の爆発を起こした。

アンチスキルが到着した時には施設の形どころか、残骸すらなかった。

幸いにも広い土地のおかげで、被害は施設だけで済む。

それから十年後。

少年は生きていた。

シークレットプラン
隠密候補として。

序章 始まり（後書き）

次は第1話です。

名前と能力はまだ解明しません。

第一章 一時停止（エクスプローラ）（前書き）

第1話です。

能力は出ませんね。

第一章 一時停止（エクスプローラ）

学園都市

東京西部に位置する完全独立教育研究機関。東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市。総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人（その8割は学生）。最高権力者は統括理事長のアレイスター・クロウリー。

あらゆる教育機関・研究機関の集合体であり、必要な生産・商業施設や各種インフラも都市内に完備されている自己完結した都市。最先端の科学技術が研究・運用されており、都市の内外では数十年以上の技術格差が存在する。主な電力源は風力発電なのか、都市の各所には大きな風車がいくつも取り付けられている。都市はそれぞれ特色のある23の学区から構成されており、それぞれの学区で独自の条例が、都市の法律とは別に制定されている。

建前では日本の一都市であるが、実際には統括理事長および統括理事会が行政・立法・司法の全てを独自に運営し、その実態は独立国家に相当する。学園都市第四学区――

少年は、この第四学区に密かに暮らしている。

現在はコンビニ袋を片手にぶら下げて夜道を歩いていた。車も人もいなく、音が一切として消え去った静かな夜。

学園都市のルールでは、高校生以下の学生は六時までしか外で遊んではいけないというのがある。しかし、少年はそのルールを平気で破り無断で外出をしていた。

「よお、坊主」

突然、前方から男が声をかけてきた。

「……」

少年が無言で突っ立っていると、徐々に人の数が増えていき、最終的に8人の男達が剣崎を囲んでいた。

「財布を貸してくれない？」

唐突としてリーダーらしき男が言ってくる。

「あゝ あ？」

「いいからサイフをよこせっ！！」

少年に男が言っていると果物ナイフをポケットから取り出し、振りかざす。
急な展開だ。

けれど、少年が驚く事はなかった。ひらり、と簡単に向かって来る
ナイフを持つ手を避け、両手でその手を掴む。

「！？」

男が驚くのも束の間、少年は男の手をあらぬ方向にねじ曲げた。

「手がぁ、手がぁぁぁあ!!」

男は余りの痛さに絶叫する。

「このヤロオオオオ!!」

続いて後ろから二人目の男の拳が飛んでくる。少年は拳を横へ受け流し、男の腹に向かって肘を叩き込む。

「ぐあっ!!」

二人目の男は体勢を崩して地面に倒れた。

「いっっっ!!」

今度は前方にいた三人目の男の手の平から小さな火球が放たれた。

その瞬間、少年は軽く手を振り、炎を横風にする。

そして鋭い眼差しで少年が男へ駆け出した。

「来るなっ！」

再び炎を何発か発射し、少年に対して攻撃をするが全て避けられし
まい。

少年は男の懐に入ると左手で男の鳩尾を殴る。

「ぐがああ！！」

三人目の男は地面に倒れ伏せた。

残る不良共は五人。

「これじゃあ埒が明かねえな」

少年がつまらなそうに言うと、残りの五人に向かって右手を突き出す。

すると、手の平に黒い光が集まり始めた。コンマ数秒の時間経て、球状の黒球が造られた。

「く、来るぞ!!」

男達が攻撃に備える。が、黒球は破裂した。そして、黒球の破裂した衝撃が生み出され、道を挟りながら男達に迫っていった。「う、うわああああ!!」

静かな夜の第四学区に爆発音と数人の男の悲鳴が鳴り響く。道は悲惨な状態だった。

数十メートルに渡ってえぐられた地面。男たちが倒れていて中には口から泡を出してズボンが濡れている奴もいた。

「任務以外で人を殺すとめんどくせえんだ。手間かけんじゃねえ三下が」

「じつ、ごめんなさああああい！！！！！」

男達は逃げるように少年から立ち去る。少年はハアとため息をつきながら

「最近よく絡まれるな。昔はよく襲撃にあつたのに」

ビニール袋を揺らしながら男達と逆の方向へ歩きだす。
少年の姿は薬品で色落ちしてしまった白髪の少し前髪が長いシヨ―

トカットに獲物を狙う獣のような鋭い眼光に紅色の瞳。

近くに来ても学園都市最強の超能力者に間違われる程の容姿をしている少年は爽やかな夜風を浴びながら自宅へ足を運んでいく。

第一章 一時停止（エクスプローラ）（後書き）

次は第2話です。
名前出てきます。

第二章 隠密候補（シークレットプラン）（前書き）

第2話です。

名前出てきます。

第二章 隠密候補（シークレットプラン）

現在は朝の九時。

少年は私服に着替えてとある人物に電話をした。電話のコールが三回鳴った時に誰かが出た。

『お前から電話をするなんて珍しいなあ　一時停止^{エクストラローラ}』

電話に出たのは40代ぐらいの男の声。少年・一時停止^{エクストラローラ}が電話をした先は統括理事会の倉橋^{くわいはし}である。

『それで今日は何の用だ？』

倉橋は一時停止に問う。

『ある人物について調べる』

そつ言いながら、一時停止は昨日もらった名刺を見た。

『誰を調べるんだ？』

「益田 純吾と言う奴だ」

電話から何かを書くような音がした。おそらくメモをしている。

『お前にも用がある』

倉橋は何かを思い出したみたいだった。

『統括理事会からの任務がある』

一時停止は無言で聞いた。『7月の下旬に騒ぎになった幻想御手^{レベルアップ}を

知っているだろう?」

「聞いた奴の能力が一時的に上がる物だろ。だが、あれを聞いた奴は昏睡状態になっちまう」

『まあそんな所だ。それで、幻想御手を妹達に併用させた実験・第二次絶対能力者進化（レベル6セカンドシフト）実験を再び始める。一時停止、君はその実験に参加してくれ』

いきなり唐突に言われた為言葉を失うが

「絶対能力者進化（レベル6シフト）実験つつうのは学園都市最強能力者の一方通行が実験し凍結した実験だろ。何故今になって始動する?」

『理事長が第一候補メインプランの一方通行に絶望しててな。第二候補スベアプランの垣根帝督にしてもらってもいいんだがそこまで興味を示さない。残るのは隠密候補シークレットプランの君しかないんだ。今回の実験を成功すれば君は』

『絶対能力者（レベル6）になり学園都市最強の能力者となるぞ』

絶対能力者（レベル6）と学園都市最強の能力者という単語を聞いた一時停止はニヤリと笑い

「おもしれえ、参加してやる。それで何時から開始だ」

『9月3日から開始する。場所は第三学区にある原子力研究所だ。期待してるよ』

一時停止が切る前に倉橋は電話を切る。携帯を折り畳み机に置きソファーにボフツと音をたてながら座る。

「これで姉さんの願いが叶う。待っててくれオレは必ず絶対能力者（レベル6）になって学園都市最強になってやる」今から十年前、一時停止が第3能力研究施設を破壊する一週間前

「こら、走っちゃダメでしょ!!」

白衣を着た女性が走り回る男の子に注意する。注意された男の子こそ、能力をまだ得ていない一時停止だ。エクスプローラ

「ごめんなさいお姉ちゃん」

「分かればいいのよ。貴方は優しくて自慢の弟なんだから」

白衣を着た女性・一時停止の姉は重力領域の頭を撫で微笑む。

「ねえ、どおすればお姉ちゃんを楽にする事が出来るのかなあ？」

「フフッ、この歳でそんな事を考えるなんて。いいのよ私が好きでやってる仕事なんだから」

一時停止の姉は一時停止と同じ身長になったように足を曲げ一時停止と同じ目線にし

「この学園都市はレベルが0〜5までしかないの。お姉ちゃんねその上のレベル6の能力者を見てみたいの」

「じゃあ僕がレベル6になるー!!」

一時停止の姉は再び微笑むと

「頑張つてね。応援してるから」

「うん!!」昔、一時停止の姉が言っていた「レベル6を見たい」という言葉は一時停止の頭の中に深く刻まれていた。

「それより、益田 純吾つつつのは何だったんだ？」

一時停止は改めて名刺を見る。これを渡されたのは昨日の夜、男達と別れてからだ。

男達と別れ公園で一息をついていると足音が徐々に近づいて来る。
それに気付いた一時停止は足音の方へ目を向ける。そこには黒のス
ーツを着てワックスでガチガチに固めたオールバックの男が見えた。

「初めまして一時停止君^{エクスプロード}」

「テメエは誰だ。そこらの教師じゃねえよな統括理事会の関係者が
？」

「初対面でタメ口とはいいい度胸してますが、まあいいでしょう。何
故、私が統括理事会の関係者だと？」

「オレの名前、存在は書庫^{バンク}や名簿にはねえんだよ。それなのにオレ
の名前を知ってるのは運営している統括理事会の関係者しかいねえ
んだよ」

「そこまでの推理力凄いですね。でも半分しか合ってますんよ」

ハハハッと笑う男に舌打ちし手元の缶コーヒーを持ちコーヒーを口に含み飲み込む。

「では大ヒントをあげましょう。ヒントは」

「お姉さん可哀想ですね」

男が言葉を放った瞬間、一時停止はその場から瞬時に男めがけて飛び掛かるが男は一步後ろに下がりギリギリで躲す。顔は未だに笑顔のままだ。

「デメエ何故それを！！！」

「お話はこれまでです。詳しくはまた会った日に」

男は一時停止に名刺を投げ渡すと虚空へと消えていった。

「チツ、空間移動系の能力者か」

近くにあった椅子をガンツと蹴り飛ばし苛つきを静める。
静まった所で男から渡された名刺を見る。そこには 益田 純吾と
かかれているだけだった。

「益田 純吾……アイツは何故十年前の事を知ってやがる」

第二章 隠密候補（シークレットプラン）（後書き）

次は第3話です。

原作キャラ登場です。

第三章 妹達（シスターズ）（前書き）

第3話です。

原作キャラ登場です。

第三章 妹達（シスターズ）

エクスプローラ
一時停止に絶対能力者進化（レベル6シフト）実験の参加通告を受けてから2日たった朝。

「何時もこんな時間に目覚めるなんて健康生活みてえなもんだな」

時刻は午前7時。規則正しい生活している人達が最も起きる時刻だ。一時停止はそんな事を気にする人間ではないが昔からの影響で起きてしまうのだ。

「ん、統括理事会から手紙だと？」

郵便受けから封筒が出てくる。そこには統括理事会と書かれていた。一時停止はソファーに座り中身を開け手紙を読む。

エクスプローラ
拝啓、一時停止様。

この度は学園都市統括理事会より絶対能力者進化実験の主催場所の御変更の為お手紙をお書きになります。

主催場所は第三学区原子力研究施設地下と申しておりましたが、第七学区にある鉄橋で行います。

開始時刻は午前00時と早めの時間ですが時間厳守でお願いします。

「案外近場でやるんだな」

主催場所の変更に感心しつつ二枚目の紙へ目をやる。

今回は妹達10530号〜10535号までの6名の殺害で絶対能力者へ変更します。

但し、今回は幻想御手を用いて妹達の能力の向上を成功した為6名になったので間違えのないようにしてください。

この6名の妹達は幻想御手を用いた結果、レベル3からレベル4へ昇格し新たな能力『補正電気』を得るのであしからず。

「ほお、レベルアップ幻想御手を用た大能力者（レベル4）の奴らを殺せばいいんだな。あんま気に食わねえが」

読み終えた紙をベランダから投げ捨てそのまま家を出ていく。

この紙をベランダから投げ捨てた事により再び少年が動き始めるのをまだ知らない。エクスプローラ一時停止は近くの公園のベンチに腰掛けている。手に持っているのは昼飯の弁当と菓子パンだ。時刻は午後03時、小学校の生徒達がランドセルを背負って下校しているのを横目で見ながら弁当の白米を頬張る。

（オレもこんなガキの時に皆と下校してえと思った時期もあったな……）

自分の過去を振り返りながらおかずのエビフライを頬張るとボールが足元に転がって来る。

「すみませえーん。ボール取ってくれませんかあー？」

遠くから少年数人が一時停止に近付いてくる。少年達に気付いた化学変化は足元にあるボールを手に持ち少年に向かって軽く投げる。

「有り難うございますー!!」

少年達は一時停止^{エクスプローラ}に頭を下げると奥へ行ってしまう。再び弁当の白米を頼張る。その顔は少しにやけている。

（たまにはお礼をされてもいいな……って何考えてんだオレ!?!）

自分の表情を顔を横に振り戻す。するとベンチ脇でニヤーと鳴き声が聞こえる。一時停止^{エクスプローラ}はベンチの脇を覗き込む。そこには黒い子猫が一匹ダンボールの中にいた。貼り紙に『飼い主募集』と書かれている。

「飼い主が手に負えなくなつたから捨てられたのか。ケツ、いいざまだな」

子猫は化学変化の言葉を無視し菓子パンを物欲しそうに見つめている。それに気付いた一時停止は^{エクスプローラ}

「デメエに菓子パンをやるくらいならオレが食った方がマシだな」

弁当を近くのゴミ收拾口付近に投げると菓子パンを開け少しちぎり頬張る。その姿を見ている子猫は一時停止が^{エクスプローラ}持っている菓子パンを取ろうと必死にもがいている。

「そんなに欲しいのかよ……」

一時停止は^{エクスプローラ}ハアとため息を吐くと菓子パンを軽くちぎり子猫を渡す。子猫は余程お腹が空いていたのか早々と食べ再び物欲しそうに見つめている。

「食い意地張ってんなあ。ほらよ」

エクスプローラ

一時停止は再び菓子パンをちぎると子猫に渡す。すると後ろから誰か近付いてくる音が聞こえ後ろを振り向く。そこには常盤台中学校の制服を着た少女が立っていた。

「おや、先客がいらしてたんですか。とミサカは少し悲しい表情になりながら問いかけます」「先客じゃねえよ。只ここにいてコイツがオレの菓子パンが欲しいって言ってたからあげてただけだ」

「子猫は人間の言語を話しませんよ?とミサカは小学生並の知識の貴方にプツと鼻で笑います」

エクスプローラ

少女に初めて鼻で笑われた一時停止は顔を真っ赤にし

「なっ!?! テメエ、オレを小学生並の知識と言いてえのか!?!」

「実際、小学生でもその位は知っています。とミサカは辺りの少年達から聞いた答えをそのまま答えます」

「それは言葉の綾って————待て、ミサカだと?！」

少女の言葉に化学変化は反応する。彼女は自身をミサカと呼んでいるのと書庫で見た超能力者（レベル5）の第三位・御坂美琴と瓜二つという事に

「はい私は御坂10535号です。とミサカは初めて会った人に改めて自己紹介します」

（コイツ明日オレに殺されるのによく愛想良く接せられるなあ）

エクスプローラ
一時停止は改めて御坂10535号をまじまじと見る。御坂10535号は一時停止の行動に疑問を抱き

「ミサカの身体に何か付いていますか?それとも、私の身体に目的があるのですか?とミサカは女性雑誌に書いてあった男と女の関係について聞いてみます」

「別にテメエの身体なんざ興味ねえよ」

「それは良かった。とミサカはホツと胸を撫で下ろします」「――
――とミサカは最近の情報を自慢気に貴方に説明します」

「まあ最近テレビとか見てねえし。そんな事言われても分かんねえ
よ」

「そんなに猫に興味がないのですか。とミサカは投げやりな態度の
貴方に少し不機嫌になります」

「悪い悪い」

あの後、御坂10535号と小一時間ベンチで隣り合わせで喋って
いた。最近はずぶくだけで喧嘩を売られたり逃げられたりする一時
停止にとつてはとても楽しい時間だった。
エクセス
フローラ

「では、ミサカは用があるのでここでお別れです。とミサカは去り

際の挨拶をします」

御坂10535号は化学変化にペコリと頭を下げ公園を後にした。
一人残された一時停止は

（久々にこんな感情になっちゃった。こんな感情を抱いちゃうとア
イツを殺せなくなっちゃう、今日の事は忘れる）

一時停止は右手を強く握り再び開き改めて実験へ望む事を決意する。

第三章 妹達（シスターズ）（後書き）

次は第4話です。
実験開始です。

第四章 実験開始（エキスパーマメント）（前書き）

第5話です。

実験開始です。

第四章 実験開始（エキスパージメント）

実験日当日。

エキスパージメント
一時停止は指定された場所に到着すると、そこにはある少女の姿があつた。

「お待ちしていました、とミサカは来た参加者に一礼します」

シークレットプラン エキスパージメント
「貴方は隠密候補の一時停止でよろしいですね？とミサカはあなたに質問を要求します」

「ああ」

エキスパージメント
低い声で一時停止は返答する。今は前にあつた時と全く違い冷徹な眼差しで御坂を見据える。

「了解しました。実験の説明に入ります」

「今回は、ミサカと2人の相手をしていただきます。これは大能力者（レベル4）相手にどう対応し無力化するかどうかを検証します。とミサカは説明を補足します」

御坂10535号の説明を聞きながら一時停止は周囲に目をやる。
そこは、緑色の鉄骨で組みあがった鉄橋。昼頃は出張へ向かう職員の車や、大学生が運転する車など様々な目的で通る車類が多いが夜頃になると車が全く通らず無人の橋となる。この時間帯では誰も寄り付かない為、実験には最適な場所と言えるだろう。

「話を聞いていますか？とミサカはよそ見しているあなたに問いただします」

「悪い。始める」

「時間になりましたので実験を開始します」

御坂10535号の背後から新たな少女御坂10530号が現れ御坂10535号の隣に立ち一時停止エクスプローラを無の表情で見据えている。

御坂10530号は一時停止に接近すると左腕に生成した電撃を纏わせ腹部めがけて殴りかかるが、当たる直前に電撃がパアと消える。一時停止のカウンターの拳が御坂10530号の顔面に叩き込まれる。

「ぐっ……なっ、何故……」

自分の攻撃が無効化され唖然としている御坂10530号の顔を見た一時停止はゲラゲラと笑い始め

「何、まさか自分の能力が消えてビックリしたんですかぁ！！オレの能力を甘く見んなよ。」

「オレは一方通行とは違えんだよ。一方通行は体表面に触れたあらゆる力の向き（ベクトル）を任意に操作する能力だがオレは力の大きさ（スカラー）を任意に操作する能力だ。スカラーは他に質量、長さ、エネルギー、電荷、温度、無次元数などがある。テメエが纏った電撃は電荷も関わっているんだぜ、このオレに通じるかよ」

一時停止は御坂10530号に近づくが、ある攻撃で阻害される。

御坂10530号には金属製のネジが握られている。御坂10530号は、ネジを指で弾くと同時にネジに電磁加速を加えて放つことで超電磁砲レールガンより威力は弱まるが電磁狙撃砲と変わらぬ威力で打ち出せる。

エクスプロード
一時停止に絶対当たるはずのネジはカランと音を立てて道路に落ちる。無論、一時停止は無傷だ。エクスプロード

「学習能力がねえのか？ スカラーはエネルギーも含まれるんだぜ。アクセラレータ
一方通行はこのまま反射でデメエにブチ当ててたけど。オレの場合は向きは操作で出来ねえからな、打ち出したネジの速さを操作して無効化したただけだなあ」

エクスプロード
一時停止は自分が歩く速さを操作し瞬足で御坂10530号の後ろへ回り込み回し蹴りを打ち込む。不意を付かれた御坂10530号は防ぐことも出来ずノーバウンドで近くの鉄骨まで吹き飛ばされると鈍い音と同時に身体は鉄骨に留まっている。

「御坂10530号！！」

御坂10535号は吹き飛ばされた御坂10530号に近付こうと

するが一時停止は御坂10535号にゆっくりと近づき

「おいおい、テメエはオレに殺されんだぜ。他人の事を考えてる暇があんのか？」

一時停止は地面を軽く蹴ると地面の質量を操作し御坂10535号の足元の地面がいきなり伸びる。間一髪で避けた御坂10535号だが、それは一時停止の策略である。速さを操作し瞬時に御坂10535号の背後に回り込み、着地した御坂10535号の腹部に膝を叩き入れる。

御坂10535号は避けられず一時停止の膝が叩き込まれると口から何か出てきそうになったが、どうにか耐えると腹部を抑えながら間合いを取り一時停止を悲しい瞳で見据える。

「何か？今更命乞いしても意味ねえんだよ」

「そういう訳じゃありません。何故、何故貴方は親しい人を傷つけられるんですか、とミサカは攻撃を止めない貴方に疑問を問い掛けます」

御坂10535号は数日前の出来事を思い出す。猫に餌をあげた事、猫について語った事、御坂10535号にとつてそれは親しくなつたと思つていた。しかし、一時停止エクスプローラはそんな事を忘れたかのように拳を奮う。普通、そんな事は出来ないはずなのに

「オレは誓つたんだ。絶対に絶対能力者（レベル6）になると。その為なら犠牲を出しても構わない、たとえ数日前に会つた奴でもなあ！！！」

エクスプローラ
一時停止は続け様に御坂10535号の顔面に拳を叩き込む。呼び動作で防げたはずの攻撃を御坂10535号は避けずそのまま食らう。叩き込まれた頬は赤く腫れ上がっている。

「デメエ何故避けねえ。今の避けれたはずだろうがあ」

「ミサカは……親しい人を……傷つけたくありません……。なので……ミサカは……貴方に……攻撃を……」

「ふざけんのも程々にしやがねえ！！」
「テメエは実験道具、オレは被験者だ。テメエを殺そうとしてんのに何故攻撃してこねえんだあ！！」

「ミサ力は……貴方を……そう思った事は……ありません……親しくなった……友としか……」

涙を流しながら一時停止を見据える御坂10535号を見て感情が抑えきれなくなった一時停止は御坂10535号に近づき質量を分解させようとする。

「甘ったれた感情論ほざいてる暇あんなら自分の身を守りやがれええええええええええ！！！！！」

御坂10535号は目を瞑り自身の最後を終わらせようとするが、第三者の一言で最後が終わるのを止めた。

「御坂妹から離れろ！！！！」

御坂10535号に触れる手前で止められた一時停止は声^{エクスプローラ}がする方向へ目を向ける。

そこには、夏服の白い半袖のワイシャツに黒い制服のズボン。バツシユのような靴にツンツンした髪の毛の少年・上条当麻^{かみじょうとうま}が一時停止^{エクスプローラ}と御坂10535号から数百メートル離れた場所に肩で息をしながら立っていた。上条の手には『第二次絶対能力進化実験』の場所変更の紙が握られていた。

「おい、ここは関係者以外立ち入り禁止だあ。とっとと失せろ三下」

上条を見た一時停止は舌打ち混じりで促す。理由は人が殺す瞬間を相手に見させない為だ。しかし、上条は全く動こうとしない。^{エクスプローラ}

「また同じ過ちを繰り返してんのかよ。テメエ、懲りずに妹達^{シスターズ}を無闇に殺して何の得があんだよ！！たかがレベル6に人の生命^{いのち}を使つてんじゃねえ！！」

（んだコイツ？只の馬鹿か……いやっ、コイツ妹達を知ってるっつう事は、まさか！？）

エクスプローラ
一時停止は何故絶対能力者進化（レベル6シフト）実験が凍結した原因の無能力者を判明した。そう、一方通行を倒した無能力者は一時停止の前にいる上条なのだ。

「ハッ、テメエがあ最強のレベル5を倒した無能力者さんですかあ！！こりやどうもご苦労様ですね。だが、オレは一方通行と違うから上手く行かないぜえ！！」

「はあ？テメエが一方通行じゃねえのかよ」

「ハハハハッ！！あんな奴に二度目のチャンスが来る訳ねえだろうがあ！！まあアイツとオレは瓜二つだと思っけどな」

高笑いしながら上条をぐちゃぐちゃにするような恐怖心を与える目で睨みながら

「予定変更だあ。まずテメエから相手してやるよ!!」アクセラレータ一方通行を倒した実力試させて貰おうかあ!!!!!!」

第四章 実験開始（エキスパーマメント）（後書き）

次は第6話です。
VS上条戦です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2201y/>

とある科学の一時停止(エクスプローラ)

2011年11月14日02時13分発行